

(第3種郵便物認可)

中

“電子の目”で トンネル点検

最新のレーダーなどを搭載した車で、トンネル内部の欠陥を点検する技術の実地試験が十六日、本巣市の小鹿トンネルであり、国や県、技術者ら四十人が参加した。

(兼村優希)



最先端のレーダーが搭載された計測車が走行する様子を見学する参加者＝本巣市の小鹿トンネルで

国の「戦略的イノベーション創造プログラム」事業で提案された先端技術の検証を担当している岐阜大が開いた。東京の建設コンサルタント会社「パシフィックコンサルタンツ」などの研究グループが開発し、四月から実用化を目指す。トンネルの壁や天井を覆うコンクリートの浮き上がりや空洞を把握するには、工具でたたいて音の違いを調べたり、壁に機械を接触させたりして、人の手による地道な作業が欠かせなかった。開発し

本巣 最先端の計測車 実地試験

た技術では、壁から三メートル離れても内部を調べられるレーダーと高密度のレーザ、カメラなどを積んだ特殊な計測車を走行させ、欠陥箇所が立体的に見える映像に可視化する。

参加者は、計測車がトンネル内を走る様子を見学し、コンクリートの浮き上がりが測定された部分を実際に工具でたたいて確認した。同社の研究責任者の安田亨さんは「正確に欠陥を写し取るなど、人の苦手な部分を機械に担ってもらう。経年変化の確認にも有効」と性能をアピールした。

県内では今月十日、飛騨市内のトンネルで側壁の一部がはがれる事故があった。岐阜大の羽田野英明客員教授は「手間を省いて点検の頻度を増やせば、事故の未然防止にもつながる」と期待を込めていた。